



Title	日本文学史研究と文献学
Author(s)	森, 修
Citation	語文. 1952, 7, p. 36-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68414
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本文学史研究と文献学

森 修

戦後一年有半にして岡崎義恵氏の発表になる「世界文芸学序論」〔文学〕昭和二十二年三月号は学界にあたらしい論争を惹起するにいたった。すなはち岡崎氏の論文と同時に、それと対立して「文学」誌上には本間唯一氏の「文芸学の解放」が掲載されたのであったが、それに引続き小田切秀雄氏の『世界文芸学序論批判』および北住敏夫氏の『文芸学の解放批判』もついで「文学」の同年五月号に共載され、ここにはゆる日本文学派と歴史社会派との論争といふ形をとって、それが花らしく展開されたのである。その場合に岡崎文芸学の「反現実的立場」は日本文芸の様式を論ずる場合にも「芸術に於ける伝統尊重主義を強調し、そのことによつてその反社会性を遺憾なく表明している」とする本間氏のあとをうけて、岡崎文芸学における「様式研究の具体的な仕事」については一応その意義をみとめながらも、世界文芸学の提唱が「現実から出発する代りに、逆に、なんらかの抽象的な観察から抽象的をはじめめる陳腐なやり方」であるとすると小田切氏のいわゆる歴史社会的立場よりする活潑な論難にたいして、一方文芸学的立場から北住氏は「唯物論的な文芸学が、文芸を科学と混同し、かつ政治に隸従せしめた」ものであるとし、日本文芸学の様式論的立場における「伝統の追求は、「永遠的なもの」を志向す

るには相違ないが、「反日常的」なものではなくして却つて切実に「現在」に關はる」とするその応酬のなかには、むしろ一種の消極性が感ぜられてくるやうにおもはれる。それは戦前はなやかに登場した日本文芸学が、現在までに経過した十有六年の単なる歲月の推移のみによつては、これを十分説明することがあるいは不可能であるかもしれぬ。そこにはむしろ未曾有の敗戦による社会の変革とともに、日本文学研究においてもまたあたらしい動きが生じてきたところにその原因をもとむべきではなからうか。それはいはばあたらしく日本文学史を見直さうとするものであつて、変革期の時代精神をそこにみる事ができるであらう。かくかんがへるならば文芸学派との間に年代的な隔りを感じるとともに、むしろそれ以上に方法的なずれといふものがつよく感ぜられてくるやうにもおもはれる。それにはたいして一方歴史社会派が若き学徒の関心をたかめてゐるのは、その立場の如何にかかはらず、結局は文学史をあたらしく見直さうとするその文学史的方法にあるとみて差支へはないであらう。それならばこのやうな文学史的関心のたかまってきた理由は一体どこに求められるべきであらうか。それはさきにも述べたごとく、未曾有の敗戦による社会の変革が、日本文学研究においてもその歴史的関心をつよめたものとかんがへられる。しかしそれと同時に日本文学研究自体のうへにおいてもまた、文学史的研究をうむべき地盤がすでにととのへられつつあつたものといふことができるのではなからうか。すなはち文学史的関心を生ずる背景には、上述のごとくひろく一般社会のうごきがかんがへられるとともに、さらにその根源として国文学界における研究史的段階のそのやうな成熟をつよくおもはぬわけ

にはゆかぬのである。それならば国文学界における研究史的段階はこれまでどのような状態に達してきてゐるのであるか。

おもふに、わが国の文学研究において近代学的問の方法が確立されたのは、芳賀矢一博士の日本文献学よりはじまるものであることは今さらいふまでもない。その場合に芳賀博士の文献学は「文献を通じ之を根拠として、日本の真相を知る学問である」（『日本文献学』）と定義され、その包含するところの研究分野は可なり広範囲にわたつてをり、いはゆる国民性の究明をその主要任務とするものであつたといふことができるであらう。しかしながらそのうち佐々木信綱博士および池田龜鑑博士などによつて、その研究範囲のうへにまたおほくの変化がもたらされるにいたつたのである。すなはち佐々木博士によれば「文献学的研究」は「文学史的研究」および「文学批評的研究」にたいするものとしてかながへられ、その任務とするところはすなはち「文献の批評」書史的研究および本文批評的研究」と「文献の解釈」（註釈的研究および民族精神研究）であるとされるものである。（『国文学の文献学的研究』）ここに文献学が文学史や文学批評によつて、その範囲を限定された基礎的な方法となつるとともに、一方またその任務についても「民族に固有な精神生活を明らかにする仕事にまで及ばなければならぬ」（同書）ことをいひながら、しかも「この意味の文献学的研究は、国文学の歴史的研究にも、文学批評的研究にも密接に關係する」（同書）ものとして、結局基礎的な書史的研究、本文批評的研究ないしは註釈的研究にその力点がおかれてゐるのである。また池田博士も文献批判について、これを低度批判（本文批判）と、一方高度批判（文学的批判または歴史批判）との二つ

に分類し、そのうち後者の「判断は勢ひ芸術家的、主観的性格を帯びるに至るであらう。このやうな批判的処置は、本文批判領域を超えるものである。我々は先づこのやうな高度批判を我々の当面の範囲から嚴重に除去する」（『古典の批判的処置に関する研究』（第二部））と宣言し、いはゆる低度批判に重点がおかれたのであつた。かくして芳賀博士にはじまる文献学は漸次隆盛におもむくとともに、最初国民性の究明を主要任務とした文献学の研究範囲も、やがて本文批評をその中心内容とするにいたつたのである。このやうな変遷は一体何にもとづくものであらうか。

これについて大正十二年の関東大震災火災による文献の消失から、すなはち文献整理の必要が痛感され、それにたいする関心のたかまつてきたことが第一にかんがへられる。それとともに文学における科学的方法ともみなされる自然主義文学が、明治末年以後おとろへをみせてはゐたものの、しかし、その変形である私小説がそれに代つておこなはれ、大正末年にはその地位の確立をみるにいたつてゐることをもかんがえておかねばならぬ。ここに文学研究における自然科学的方法の時代の根源を見るのであるが、このことはあたかも芳賀博士の文献学から佐々木、池田両博士などにみられる本文批評への移行をおもはずものであらう。結局文献の蒐集、批評の方面において校本万葉集完成の中心となつた佐々木博士、ならびに伊勢物語、土左日記、源氏物語の校異を成就した池田博士によつて、文献学の定義といふものもいはゆる本文批評にその中心をおいて行つたことは、また当然であつたといはねばならぬ。それと同時に日本文学研究一般においてもその風潮をうけて、文献学といへばただちに本文批評をその主要任務と

みなすにいたつたのである。このやうにして芳賀博士により「日本の真相を知る学問」といふ定義をあたへられた文献学は、なほ久松潜一博士などによつて日本精神史学としてうけつがれながら、何時しかその窮極の目的はかへりみられぬやうになり、「如何に些細なる事柄をも」「たゞその全体の為の研究してゐるといふ自覚を忘れなければよい」(『日本文学』)といふその根本精神さへうしなはれようとするにいたつたのである。勿論日本文学研究のあり方として文献学がその最後の目的にそふものであるかどうかについては、はやくも藤岡作太郎博士によつて「例へば文献学の如き、文学を目的とせるか、はた手段とせるか、その區別あるものありといはざるべからず」(『鎌倉室町時代文学史』)との疑問が投げられてゐるのである。そこに文献学の目的について最初から問題を生ずべき根本原因をかながへることができであらう。しかしながらその目的の相違を認識すること、一方はじめからその目的を閉却することとは全然ちがふものである。藤岡博士においては「文学史は文学を対象として見るが故に、名作と拙作との區別を立て、飽くまで文学を目的とすることを忘るべからず」(『鎌倉室町時代文学史』)といふ確固たる目的がかながへられてゐたのであつた。しかし一般の風潮として文献学が本文批評としてみなされるようになった場合、そこに本文批評としての研究上の目的が確立されてをらぬならば、それは文献学の些末主義となるべき一面も生じてくるであらう。しかも「文献学といふ学の対象又は内容は、時代と共に変化してをり、今日でもその概念は末だなほ十分明確に規定されてゐない」(『古典の批判的処置に関する研究』第二部)のである。もし文献学においてその本

文批評のみをおもんじて他をかへりみぬやうなことがあつたならば、ここに日本文学研究としては芳賀博士の日本文学よりも一そふかたよつた科学主義の弊害が歎ぜられることにもなつてくるのである。岡崎氏の日本文学は以上のごとき傾向にあきたらぬ学徒にとつては、まさに渇水におけるよるこびであつたといふことができよう。しかしながらそれは真の意味において在来の文献学の批判となりえたであらうか。

そもそも文献学の批判としてうまれたはずの日本文学にたいして、却つて抵抗をしめたのは歴史社会派の人達であつたといふことができる。むしろ日本文学によつて批判されたはずの文献学派の人達は冷淡な態度をよそはうてゐたのであつたが、それは岡崎氏の文献学にたいする考へ方に偏狭な点をみとめたためであつたとかながへられる。すなはち「今日の『国文学』は『文献学』中の文芸と無關係な部分をも多量に抱擁してゐるのであるから、此部分を払拭する必要があるのである。その著しい点は古文書史的研究(書誌学、本文校定等を含めたもの)である」(『日本文学』)として、氏は日本文学の範圍よりいはゆる本文批評の文献学を排除しようとするのである。しかしながらこのやうな単なる払拭といふことをもつて、簡単に文献学の問題は解決したことになるであらうか。勿論古文書史的研究(書誌学、本文校定等を含めたもの)がそのまま文学研究でないことはいふまでもない。しかしそれであるがゆゑに「文芸と無關係な」ものと單純にいひきれるであらうか。もし日本文学研究として文献学の意義を批評し、その克服をこころざすならば、在来の国文学においてしめた文献学の重要な地位の、よつてきたるところを深刻に

反省して見る必要があらう。すなはち芳賀博士の国民性究明を目的として日本文献学から、やがて本文批評を中心とする斯学のたどってきた歴史的経路をきはめることによって、はじめてその文献的境界の具体的根源をさぐることができるのではなからうか。その意味において古文書史的研究（書誌学、本文校定等を含めたものは文学研究の基礎学ではあつても、けつして「文芸と無関係なもの」とはいひえぬであらう。岡崎氏が文芸学樹立をつよく主張するのあまり、その文献学批判がむしろ形式的となり、結局日本文学研究における文献学的立場の眞の批評ではなかつたといふことができるのではなからうか。ここに日本文学が文献学を超越できずして、ただ文献学派にたいして別個の一派を形成するにとどまつたといはれる原因がもとめられるのである。換言するならば日本文学がいはゆるドイツ文芸学などの影響をうけつつ、もたらされたものであつて、その成果については岡崎氏個人の努力にまつところがおほく、結局日本文学研究史のうへにそれが十分芽ばえるべき史的坩堝についてはむしろ薄弱であつたやうにきかへられる。そこに日本文学が漸次孤立をきたしてきたしてき

た所以が存するのではなからうか。勿論岡崎氏個人の業績はそれ自体として、たしかにみとめられるべきものではあらう。しかしながら歴史的背景をはなれた立場によつて、その実をむすぶことの困難さをおもはぬわけにはいかぬのである。

それにくらべるならば芳賀博士による日本文献学の唱道がドイツ文献学の方法ととりいれながら、徳川時代よりの国学の伝統に根ざしてゐたところに、その順調な成立の原因がかんがへられねばならぬ。そこに日本文学研究における文献学的方法の鞏固な地盤が存するものといへよう。しかしながらこれまで文献学においてなしてげられてきた業績の大半はすなはち本文批評についてで

あつた。このやうなところにまた芳賀博士以来、漸次部分化して行つた文献学の方角をも同時にみる事ができるであらう。ここにはば部分化した本文批評的文献学の克服は、結局芳賀博士による日本文献学の再検討より出発すべきものとかんがへられる。その場合に芳賀博士が「文献学の研究中にて最も重要なもの」となしたのは、ほかならぬ「文学史の研究」であつたといふことを

第一に注目せねばならぬ。それについて芳賀博士自身および藤岡博士などによる文学史の著述があつて、まさに右の主帳に應ずるものといふことができるであらう。しかしながらそれとともに一方では「文学史として為すべきこと」の大半はテキストクリチックの部においてやらなければならぬ（『日本文献学』）とされたテキストクリチックが以後隆盛におもむいたのであつた。その場合に單なる本文批評はけつして文学研究ではない。いはばそれは「文学史として為すべき大半」であるにしても、あくまでも文学史研究の一環をなすものとしての立場が認識されてをらねばならぬ。その場合に本文批評は、結局岡崎氏のいふごとく文学研究より拭拭すべきものといふよりは、むしろそれを基礎にしたうへで、その限界の克服をかんがへるべきであらう。その意味においては本文批評的文献学の克服は文学史研究の再認識でなければならぬ。勿論それは芳賀博士のごとく「日本の真相を知る」ための文学史研究でなくして、自己目的をもつたものでなければならぬであらう。しかしながらそれと同時にまた本文批評にその全体をうばはれるやうなことがあつてもならぬことはいふまでもない。ここに芳賀博士の日本文献学を再批判する意味において、日本文学史そのものの方法が深刻にかんがへられるべきときではなからうか。岡崎氏の日本文学史はいはば文学史研究を一步とびこえてすんだところの親観的な超時代的な立場があり、ひいては文献学の眞の批判となりえずにはつた所以がかんがへられるのである。

（一九五二、四二二）

—大阪府立大学助教—